

## 種子島　からいも伝来物語



### パート 1

一面、海に囲まれた自然豊かな島、種子島。

南海に浮かぶこの小さな島には、時に、国の歴史を揺るがす出来事が数多く存在します。

時は、江戸時代前半（17世紀後半）。日本は各地で食糧飢饉（きさん）に襲われ、人々は苦しい生活を強いられていました。

それは、種子島とて同じこと。それでも、人々は懸命に生活していました。

時の島主、種子島久基（たねがしまひさもと）は、どうにかして島民の生活を豊かにできないか考えました。



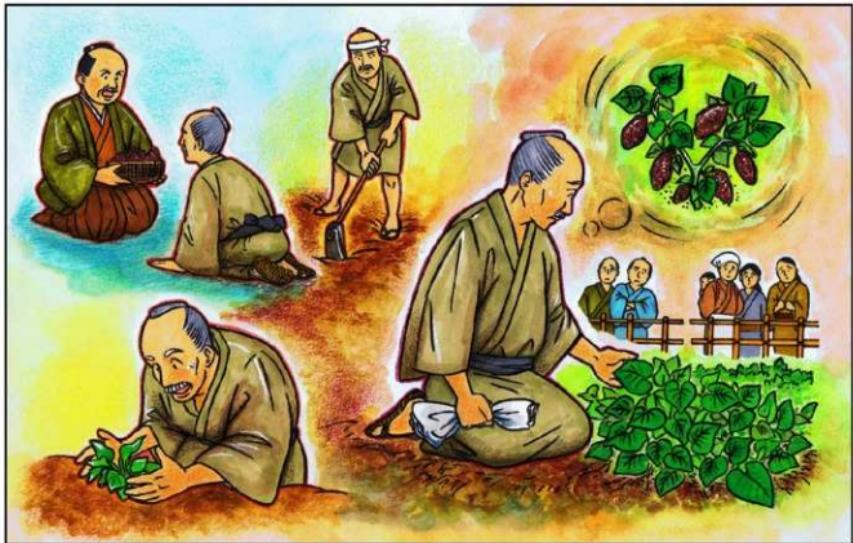
## パート 2

ある日、久基は「甘藷(かんしょ)」という食べ物の存在を耳にします。

甘藷は、育てやすく、たくさん生産でき、おまけにおいしいとの噂がありました。

「甘藷があれば、飢饉でも苦しまなくてすむ」と久基は考え、琉球(りゅうきゅう)の尚貞王(しょうていおう)より、甘藷 1 箕(かご)を譲り受け、家老西村時乗(にしむらときのり)に栽培を命じました。

これは、1698年（文禄 11 年）の出来事です。



### パート 3

時乘(ときのり)は、ある農家に甘藷の栽培を託します。

下石寺(しもいしでら)の農民、休左衛門(きゅうざえもん)です。

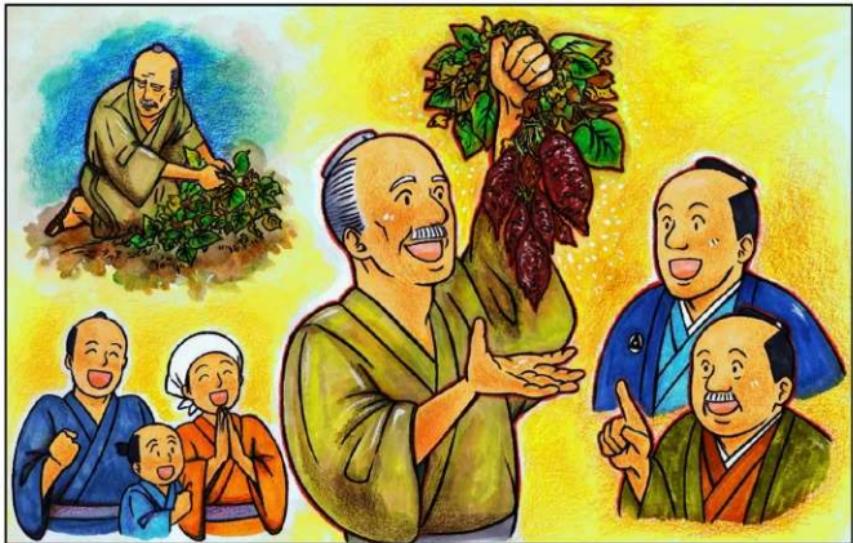
一心の期待、島の命運まで背負った休左衛門は、不安の募る中、甘藷の栽培をスタートさせます。

甘藷栽培は、もちろん初めてのこと。それでも、肥料をやり、草を取り、一生懸命育てました。

甘藷は、みるみる育ちました。

しかし、どういうことか実ができません。休左衛門は、茎から実ができると思っていたのです。

実ができないまま、時は刻々と進んでいきました。



#### パート 4

一生懸命育てた甘藷でしたが、休左衛門はとうとう実のできない茎を捨てることにします。

茎を引き抜いたその瞬間、休左衛門は目を丸くして驚きました。なんと根の先には、たくさんの実が付いていたのです。

栽培は見事成功。報告を受けた久基も大変喜びました。

さらに、久基は甘藷の増産に力を注ぎました。

甘藷の登場によって、さんざん苦しめられてきた飢饉から人々は解放されることになったのです。



## パート 5

いつしか、種子島では「甘藷(かんしょ)」のことを「からいも」と呼ぶようになります。

久基は、人々から「からいもの神様」と崇(あが)められ、現在も栖林(せいりん)神社に祀られています。

休左衛門はこの功績により、農民では異例の苗字を付けることを許され「大瀬(おおせ)」と名乗ります。

また、褒美として休左衛門夫婦の寿碑(じゅひ)も与えられました。現在でも、地域の住民に大切にされています。

甘藷が飢饉から人々を救った出来事は、全国に知れわたり、種子島から、甘藷は全国に広がっていったということです。

製作 鹿児島県西之表市教育委員会

種子島開発総合センター

2015年（平成27年）3月